



## 第 152 号

—令和6年12月20日発行—

公益財団法人 古代学協会だより



再現  
紫式部の旅—船出の儀



大津市サンシャインビーチにて

写真 中田昭

(解説は、臈谷、7頁参照)







十二単

に、袖丈は長く、袖幅や襟丈は短く計算する。代わりの織物はないので、裁断には一番神経を使います。必ず一晩寝かせ、翌朝、再度測り直して、「えいっ!」と気合を入れて裁断する。最初の袂を入れる、その一瞬の緊張感は、糸を生み出してくれた蚕、糸を紡いだ人、染め、織り、張り、その責任全てが袂にかかってくる。そう思うと、何度体験しても慣れる事はありません。



板引きされた布

仕立てには、織物の色に合わせた沢山の色の手縫糸が必要なのですが、近年、残念で心配なのが、微妙な色合いの色がなく、近い色を選ばざるを得ないことが多々あるようになりました。特に、穴糸という太い絹糸は本当に色数が少なく、「この色はこれで最後」といわれると、無念さに苛まれ、お店の糸を買い占めたいくなります。道具や材料は、使いやすいのものがシャボンの泡のように後から後から消えていく感覚です。今日あっても、明日ある保証はない。その利那に、深い憂いを感じます。「板引き」という技法も消えてしまった装束技法の一つです。同志社女子大学名誉教授 清水久美子先生が「先代がされていた」と依頼されたことに始まります。残念なことに、少しの資料は残っていたものの、十分なものはなく、途絶えたものを掘り起こす作業が、これほど大変とは思いませんでした。新しい

での大切な仕事の一つ。着物の着付けと違い、装束の数と同じく衣紋の方法もあり、人に合わせた寸法の装束では無く、一律の寸法で出来ているので、着る人に合わせて衣紋する事はとても難しく、経験値がものを言います。その中で、自分で仕立てた装束を、その手で衣紋させてもらえる時ほど、幸せに感じる事はありません。子を成人させ、送り出す様な、感慨深いものがあります。なので雨に打たれた装束たちのその光景は、頭から離れず心から切なく悲しくなります。昨今、絹の扱いを知らない人がほとんどなのです。

十二単を学ぶ事は、最初、傷んだ裏を取り替えるところから学びました。糸を解く事は根気のいる作業ですが、解くことで、縫い手の息遣いや、技術が学べる生きた教科書なの

です。毎年新調がある訳では無いので、最初は袖からでした。なかなか一から作らせてもらえる訳もなく、合間の作業を手伝い、見て覚えることが何年も続きました。装束の形状を理解し、ようやく一人で裁断から仕立ての工程に入れたときは、長いトンネルから抜け出した様に目の前がパッと開けたように感じました。「裁断ができて一人前」と師匠である叔母には言われました。洋裁なら型紙、着物なら寸法に沿って裁断しますが、装束の場合は、型紙も、きつちりとした寸法もありません。見本を踏襲することもあります。大抵は文様の配置に応じて寸法を割り出し裁断します。十二単となると全体を調和の取れた形に仕上げる為に、全部の寸法を一人で割り出し計算しないといけません。上に重ねる程に、袖丈は長く、袖幅や襟丈は短く計算する。代わりの織物はないので、裁断には一番神経を使います。必ず一晩寝かせ、翌朝、再度測り直して、「えいっ!」と気合を入れて裁断する。最初の袂を入れる、その一瞬の緊張感は、糸を生み出してくれた蚕、糸を紡いだ人、染め、織り、張り、その責任全てが袂にかかってくる。そう思うと、何度体験しても慣れる事はありません。

課題にワクワクしたのは最初の数年。出来上がる工程をもう一度掘り起こすことは、気が遠くなる作業で、当時(平安時代)使われていたであろう材料は、先代の資料から読み解きつつ、手探りで糊調合と施行技術の確立に至るまで、十年以上かかりました。毎日、板引きのことが頭から離れず、糊作りのために何カ月もお粥生活をしたり、糊調合のためキッチンを実験場と化しました。まだ完璧とは言えませんが、清水先生や主人と試行錯誤しながら一応の形となった今、次の代に継承すること、板引きに対する周知を促すことが次なる課題です。

新しい装束と出会うたび、主人や義父母、叔父、叔母に教えて頂いた、その一つ一つが今では私の宝物となり、今でも頭の中で皆の声に励まされます。こうして書き記していると、その時の様子が走馬灯のように流れ、有り難く、涙が溢れます。今まで頂いた技術を次の世代に渡すことが私の課題となりました。伝えることの難しさを感じつつも、少しずつ肩の荷を下ろさせてもらえる有難さを噛み締めるこの頃です。

でも、時々ふと思うのです。「蘭陵王の雅楽装束はいまだに来ない」。だからこそ、その日を楽しみに今も続けられているのかもしれない。

## 父 米田雄介のこと

大阪工業大学教授

米田達郎

私に物心がついた頃にはすでに、自宅の書斎には研究書が山積みされていた。文字通り足の踏み場もなかった。そのような部屋を我が家では勉強部屋と称し、我々子どもたちもそこで勉学に励んでいた。狭いにも関わらずである。学校の宿題やら定期試験、果てには受験勉強もその部屋で行い、少しでも手を抜いているのが分かった「集中しなさい」と

雷が落ちた。恐かったのだろう、いかに父の機嫌を損ねないかということに苦心をしていた。自分の課題をこなす傍らで、父の様子を覗くと、山積みされた資料の中からゴソゴソと本を取り出しては丁寧に研究ノートを作成していた。今からすれば書陵部での仕事や論文を執筆していたのだろう。仕事のスタイルは、正倉院や神戸女子大に勤務していたとき

も同様である。



マドリード トレドにて 2008 年

長い研究者生活の中では誰しもが順風満帆というわけではない。父にもそのような時があった「はず」である。父の仕事の進捗状況を私が知る指標は、書斎の外にまで漏れてくる煙草のにおいであった。眉間にしわを寄せ、蓄えていた資料を何度も見返しながら、仕事に黙々（モクモク）と取り組んでいた姿が思い出される。このような状況であっても、日本史の事項を父に質問

すると、丁寧に回答してくれた。子どもとの会話には、どれだけ父が忙しくとも、適当な対応をすることがなかった。ただ、受験には必要ないほどの詳細な説明で、違う意味で「沈黙は金なり」と思ったことを覚えている（出題されたことがなかった）。逆説的に捉えれば、自分で調べなさいという教えであったか。とにかく、仕事が順調なときも、そうでないときも、その取り組む姿勢は誠実かつ厳しいものであった。

書斎から出てリビングで仕事するようになったのは、我々子どもが実家を出て、母と二人で暮らすようになってからではないかと思う。何かの折りにそのことを話すと、母の話し相手をしているようなことを言っていたが、実際は静まりかえった家が寂しくもあったのだと思う。私が高家近所に住居を移してから、時々、実家に孫を連れて行ったが、かえって騒がしくなり、それはそれでありがた迷惑であったか。

父は仕事一辺倒のように見えるその一方で、休日には家族を連れて出かけることも多々あった。東京国立博物館やサントリ美術館にはよく出掛けた。当時の私が美術品に興味を示すことはなかったが、父の「とにかく見ておけ」という一言で連れて行かれた。「視野を広げろ」という教えであろうが、小学生に対して



神戸女子大学 研究室にて 2008 年

もう少し丁寧な説明があるだろうと今更ながらに思い出す。父は好奇心旺盛、かつ周囲に目配りもしていた。このことは研究態度にも表れていた。古代史を専門としていたものの、その時代に拘ることなく、自己の研究に少しでも役に立つと思われるものを日頃からチェックし、それらを研究に活かしていたからである（正倉院に関わる事項中心ではあったが）。私が小学生の頃、毎年夏には旅行に連れて行ってもらった。富山、日光、伊豆半島などが思い出される。静岡県が多かった印象であるが、海水浴が目的でもあったので分からないでもない。関西で言えば、和





家族と共に 香川県金比羅宮にて

歌山や淡路島に行くような感覚である。ただ、父との旅行は海水浴だけで終わった記憶がない。必ず、その地域の史跡めぐりがあった。伊豆半島では、源平の争いに関わる史跡などを中心に見て回った。幸いなことに私は『平家物語』を読んでいたので（もちろん現代語訳）、いくつかに見て回る内に、そのうち鎌倉にも行くのだろーなと感じ取っていた。しかし、ついぞ「いざ、鎌倉」とはならなかった。時間がなかったのか、はたまた別の理由なのか、よく分からない。特定の年代のものだけではなく、韋崎では西洋砲術を普及させた江川英龍の反射炉も見学している。当時はよく分からなかったが、日本語学を専門とする、今の私の研究には、数十年経過してから役に

立っている。父の好奇心の旺盛さに感謝である。

父の好奇心は、研究分野以外にもおよぶ。事実、ワードプロセッサーが売り出された当初、「今後はワープロだ」と言ってワープロを購入し、パソコン（たぶんウィンドウズ95）が世間で話題となったときも早々に購入していた。携帯電話やタブレットも早くから手元に置き、それらから情報を得ていた。研究に活用できるモノに限らず、時代の最先端を追っていたように思う。そういうものの、晩年に正倉院展に関わる講演を行う際、パワーポイント資料の大半を私に作らせていた。好奇心が強かったとはいえ、さすがに覚える気にはならなかったと思われる。好奇心の旺盛さは、海外にも向

けられた。中国、台湾、トルコ、イタリア、エジプト、フランス、ウズベキスタンなどに出かけている。シルクロードに係するところを中心であった。私はイタリアやフランスなどに同行

しているが、そこでの父は史跡そのものだけでなく、史跡内にあるカビの状況にも注視していた。正倉院宝物の保存方法やその期間と関係があることはすぐにわかった。またエジプトでは、そこで描かれる馬の尻尾の向きに注意を払って見ていた。シルクロードを経由した日本で、馬の尻尾の描かれる向きを、疑問に思っていたようである。これらのことを論文などにまとめたのか定かではないが、古代行政史以外にも興味を持ち、自分自身で視野を広げていた。

私には厳しかったが、孫たちに対してはやさしかった。一般的に祖母は孫に対して甘いと言うが、父もこの範疇に入る。私自身は祖父母との旅行はもとより出かけた記憶がほとんどないこともあって、自分の子たちには祖父母との思い出を作らなかった。私の考えを知ってか知らずか、孫たちとは頻繁に会話し、元気な時には旅行にも出掛けていた。心身の負担を考えれば、決して楽なことではないが、孫たちの世話をし、その時間を大事にしていた。

二〇二四年八月二〇日、父米田雄介は享年八九歳で亡くなった。数年前から入退院を繰り返していた。それでも体調を整えつつ、何かしらの仕事に対応していた。しかし特殊な治療薬の影響もあり、徐々に体力がなくなっていく、亡くなる一

カ月半ほど前からは入院していた。家族としては仕事を引き受けることを遠慮し、好々爺としてのんびりと過ごしてもいいのではないかと考えてもいたし、実際に伝えもした。しかし仕事と趣味が一致していたためか、仕事を辞める、中断するという気持ちには全くなかったようである。最晩年に父が思い描いた研究内容について、私の立場からは知り得ないが、研究者としての力量を余すところなく、亡くなる寸前まで発揮できたと思う。

正倉院所長を定年で退職してから、広島県立女子大学（現広島県立大学）、神戸女子大学に勤務している。その後、仏教美術協会会長、法華寺学術顧問、古代学協会理事・研究部長などでお世話になった。定年退職後に再就職することが難しい時代である。そのような中、世間から必要とされていたことは、本人・家族にとってはありがたく、喜ばしいことでもあった。また、父自身が周囲に気配りをしていたこともあったと思うが、何よりも父は職場やそこでの方々に恵まれていた。特に古代学協会には、年齢を重ねた後に着任したにも関わらず大変なお世話していただいた。ありがたいかぎりである。父が関わった方には時折、父のことを思い出していただければ、幸いである。

# ドラマ「光る君へ」に思う

同志社女子大学名誉教授

隴谷 壽



出版記念公開講演会にて  
(京都府立京都学歴彩館)

道長の子を生むのではないか？」と冗談交じりに言ったものである。そしてその後日、「先生、当たりましたね」と、これには笑って遣り過ごすしかなかった。

紫式部をはじめ王朝女流作家の母について知識を持ち合わせている人は少ない、というか歯牙にもかけていない人が大半ではなからうか。ところが、あの放映以降は、会う人の中には「紫式部の母って斬り殺されたのですね、知らなかった……」という人も出てきた。これから、これが独り歩きすると式部には気の毒かと思う。ただ、史実かどうかは証明できない。しかし、後に道長の息子の兼隆（蔵人頭を経て中納言を極官とする）と式部の娘の賢子（大式三位、藤三位、越後弁、弁乳母などの称あり）が結婚して一女が生まれているという史実（赤染衛門の『栄花物語』）を知ると、その可能性はあり得ないという思いに傾く。

さらに次の事実を知ってその思いを強くした。それは兼隆が十一歳で元服式を行った時、もつとも重要な加冠（元服の人に冠を被らせること）の役を叔父にあたる道

長が勤めていたることである。ちなみに関白道兼はこの三ヵ月後に疫病に罹って三十五歳で薨去している。また、長保三年（一〇〇一）四十歳で崩御した藤原詮子（東三条院と号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母）が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地まで行ったのが兼隆であることを知る（藤原行成の日記の『権記』。なお『栄花物語』と『大鏡』では道長がそれをしたことになっているが、これは史実ではない。先行の『栄花物語』は、道長を何かと引き立てた詮子の思いに道長が応えた行為を形に表すべく作したものと考えるべきであろう。

このように兼隆は父亡きあとには叔父、道長の庇護下にあり、その意を迎えることに努めた。道長が恩義を強く感じ、尽くした姉の納骨の役を兼隆に委ねたのは両者の強い信頼関係を物語るものであろう。その兼隆と式部の娘が結婚していることを考



『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、  
こうして生まれた。』表紙

えると「斬殺はあり得ない」と考える。でも、そこはドラマ。あの場面を見た人は目が離せなくなつて見続けているに違いない。ひいては視聴率アップにつながり、NHKの思う壺である。史実に拘泥せずにドラマとして十二分に楽しみ、古典の世界へ分け入ってもらえれば何よりであり、書店には古典が多く並び関心が高まっていると聞く。「古典は心を豊かにしてくれるもの」（『古典の日』宣言）の名辞が生きてくる。ドラマのおかげで京都、滋賀、福井の各県はドラマ館を開設したり、もとよりあるスポットの宣伝に努めるなどして多くの観光客を呼びこんでいる。

いくつかの県にまたがる大きな催しとして国司下向列が実行





一条天皇皇后藤原定子二条宮跡顕彰碑  
(中京区室町通二条下ル)

された。三十年近く前の平成八年(一九九六)紫式部が越前守となつた父、藤原為時について下向した時からちょうど千年。「越前武生来遊千年」と銘打って武生市(現、越前市)では源氏物語アカデミー委員長の林和彦先生を実行委員長とし、十名近い監修委員による研究を経て国司下向列を実現したのである。平安時代には夥しい数の受領が京都と任国を往来したが、不思議なことにその資料は皆無といってよい。ところが近年になって平時範の日記(平安時代後期)が見つかり、因幡守となった時範が任地へ下っていく具体的な様子や着任時に行うべき任務を熟(こな)していることを記した記録が出てきたのである。これによって実現が叶った。なお、本来なら「旅立の儀」を京都(平安京)からすべきであるが、市当局の対応が

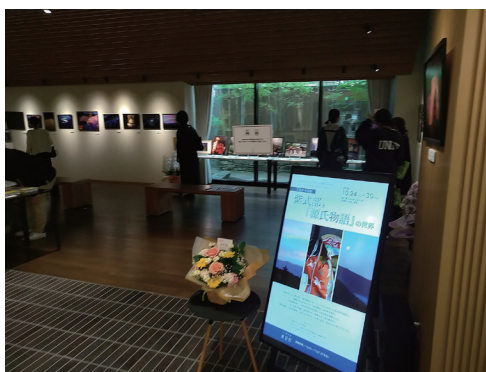
鈍かったので宇治にしたと漏れ聞いている。宇治上神社の拝殿(鎌倉時代、国宝)は寝殿を彷彿とさせるので藤原為時邸に見立ててピッタリである。一行は湖北の塩津浜での着岸の儀と無事を奉謝しての塩津神社での参拝、湯尾峠での境迎え(かつては深坂峠で挙行)をして武生へ向かい国庁に見立てた総社大神宮前の特設舞台で「着任の儀」を執り行った。なお、この行程は紫式部の歌集である『紫式部集』から辿れるもので琵琶湖は湖西を船で北上している。

今回もほぼこれに倣って行われることになっており、新しく船出のシーンなどが加わる。実は昨十月十八日に宇治上神社での「旅立ちの儀」に始まり、石山寺に参拝、琵琶湖での「船出の儀」(表紙写真)を見学してきたのである。今ごろは敦賀の気比神宮で「境迎の儀」を執り行っているところかと思う。そのあと鹿森神社に参拝して国府(越前市)へ向かい、明日、「着任の儀」を執り行うことになっている。私は、明日、武生(越前市)へ赴き「着任の儀」に参列することになっている。

古代学協会では平安時代を研究の一つの柱にしており、その意味でも大河ドラマに便乗してさまざまな催しを企画し、実行している。その一つは、平安時代に大きな足

跡を残した人の邸宅跡を顕彰することであり、長年に亘り三十カ所に近い建碑を行ってきた。なかでも廬山寺に設置の「紫式部邸」の顕彰は庭園空間を設けるなど大規模なものであったが、他は説明版と碑の建立である。近年では、里内裏の初例となった堀河殿(中京区四条通り御池東北の京都堀川音楽高等学校、皇后藤原定子の二条宮(上京区二条通り室町西南)などがあり、この一兩年のうちに摂関藤原兼家の東二条院邸跡も顕彰されることが決まっている。

いっぽう書籍の刊行も行った。「光る君へ」の報道を知った時点で、紫式部を中心とし、文章は簡潔に、中田昭氏の写真を大きく取り込み、豪華に仕上げて安価なビジュアル本の



『史実でたどる紫式部』出版記念  
中田昭「紫式部と『源氏物語』の世界」写真展  
10月24日～30日 松栄堂薫習館 松吟ロビー

出版を考えた。かくして成ったのが『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、こうして生まれた。』(光村推古書院、二〇二四年七月刊)である(前頁写真)。この本の出版を記念して香老舗 松栄堂の共催で写真家 中田昭「紫式部と『源氏物語』の世界」を松栄堂の薫習館において開催することになっており、古代学協会蔵の「紫式部日記断簡」(南北朝時代)、「紫式部集」(江戸時代)も展示予定である。また、この写真展の期間中に中田昭、畑正高(香老舗 松栄堂主人)それに私に加わってトークセッションが行われる。

さらには京都府の京都学・歴史館との共催で「紫式部の生きた王朝社会」のテーマを掲げて七回におよぶ連続講座を歴史館で開催中である。

十一世紀初頭に紫式部の手になる『源氏物語』が後世のさまざまな文化に及ぼした影響は計り知れない。日本人はこれを誇りとして学び、後世へと引き継いでいく義務があることを自覚せねばならない。その意味においても「光る君へ」の果たす役割は大いに評価すべきである、と信じている。

(二〇二四年十月十九日記す)  
(当協会理事長)

## 協会ニュース

## ◆富村文庫を金沢大学に寄贈

エジプト学者の富村傳先生（平安博物館非常勤講師）は角田文衛先生の初期の門下生のおひとりであり、日本のエジプト学の開拓者でした。富村先生は平成十八年（二〇〇六）十一月十日に逝去されましたが、ご遺族から協会に、先生が収集されてきたエジプト学の貴重な研究書を約二五〇冊ご寄贈いただき、協会は「富村文庫」を設けて大切に保管してきました。

一方、金沢大学古代文明・文化資源学研究所は、エジプト学の研究を進める上で図書の充実を計ってきました。協会は理事会で協議した結果、「富村文庫」を同研究所に寄贈



贈呈式 右：河合教授 左：山田理事

し、若い学徒の教育や日本のエジプト学の発展のために活用していただくことこそ、富村先生の御遺志に添うものであるという結論にいたりました。

八月九日、同研究所所長・河合望教授が協会にお越しくださり、贈呈式を行いました（写真）。大量の図書でしたので、河合教授と同大学の大学院生、さらには協会職員も一緒に汗を流しながらの荷造りとなりました。

## ◆隴谷理事長が「令和六年度地域文化功労者」として表彰

隴谷理事長（同志社女子大学名誉教授）が「地域文化功労者」として表彰を受けました。同賞は「永年にわたり地域の文化振興に功績のあった個人及び団体に対してその功績を讃えるため、道府県に推薦を依頼し、文化庁において選考を行い、決定された」賞であります。隴谷理事長は、「永年にわたり日本古代史研究家としてすぐれた活動を行うとともに公益財団法人古代学協会理事長等を務め、地域文化の振興に貢献している」として受賞致しました。

十一月二十日、京都府立府民ホールアルティにおいて、阿部俊子文部大臣より表彰状の授与が行われました。

## 出版だより

## ◆梶川敏夫著『ビジュアル再現 平安京 地中に息づく都の栄華』

四十年以上にわたり京都市の文化財保護の仕事に携わられた著者ならではの視点から生まれた本書は、文字通り遺跡の復元図を通して平安京を見る愉しさを与えてくれます。埋蔵文化財の行政指導が始まった当初から著者が関わってきた京都市内の各時代の遺跡の内、平安時代の平安京跡を中心としたものや関係したものに絞り、遺跡の復元図を交えて書いておられるとのこと。三十六年ほど前から個人的に作画された点数は百点以上。博物館や資料館の展示やポスター、街中に設置された説明板や現地説明会で配られる解説用レジュメやテレビ、マスコミの報道資料など、梶川先生のイラストを目にされた方は多いと思います。本書を片手に現代の平



安京を歩く楽しさにも与えてくれる一冊となっています。

A5判、三四四頁、吉川弘文館、三三〇〇円（税込）。

## ◆伴野幸一・森岡秀人・大橋信也著『伊勢遺跡と卑弥呼の共立』

弥生時代後期、琵琶湖の南部に出現し、忽然と消えた伊勢遺跡。相次いで発見された大型建物跡は、女王卑弥呼の登場と倭国の統合へ向かう時期にいかなる役割を果たしたのか。祭祀や政治の場とされる特異な建物群の配置と構造、近江周辺の土器の伝播と流通網、弥生時代の年代観などを解説。『魏志倭人伝』の記事から東アジア史とのつながりをも見通す（本書より引用）。

A5判、一九二頁、吉川弘文館、二二〇〇円（税込）



## 伊勢遺跡と卑弥呼の共立

神殿か、王たちの「議場」か？  
琵琶湖畔の祭祀遺跡から見えてきた  
女王卑弥呼と倭国誕生の時代！

吉川弘文館  
定価（本体2,000円＋税）

発行者 公益財団法人 古代学協会  
604-8131 京都市中京区三条通高倉西入ル  
菱屋町四八  
電話 〇七五-二五二-三〇〇〇  
発行日 令和六年十二月二十日  
印刷 公益財団法人 古代学協会